様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2016
課題番号：２５５９０１６１

研究課題名（和文）「迷惑をかけてはいけない」規範の表れとしての「甘え」概念の再検討

研究課題名（英文）A reexamination of the concept of amae: Amae as a self-critical view of dependence among the Japanese.

研究代表者
針原　素子（HARIHARA, Motoko）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教

研究者番号：８０６１５６６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：従来、「甘え」という日本語特有の概念は、日本人の相互依存的な人間関係の特徴を表す典型的なものであると考えられてきた。しかし、本研究では、日本人が「甘え」という言葉を使うのは、人に迷惑をかけてはいけないという規範が存在するため、相手への依存を自己批判的に「甘え」と定義するためではないかと考え、検討を行った。その結果、日本人は、アメリカ人よりも他者への迷惑を考えずに援助要請をする人を否定的に評価すること、親しい相手への援助要請を、相手に負担をかける不適切なものと考える人ほど、その行動を「甘え」と呼ぶことが分かり、仮説を支持する結果が得られた。

研究成果の概要（英文）：Amae (defined as the presumed acceptance of one’s inappropriate behavior or request) is an important concept in Japanese society. However, previous studies have shown that Asians are more reluctant than European Americans to ask for support from others.
This study hypothesized that the Japanese label their help-seeking behaviors as amae when they regard their behaviors as inappropriate based on the social norm that they should not bother others.

The results showed that 1) the Japanese evaluated help-seekers who had bothered their friends more negatively than the Americans, 2) the Japanese overestimated the burden and underestimated the pleasure the partner felt in offering help to them, 3) the more the Japanese regarded their own help-seeking behaviors as inappropriate, the more they labeled their behaviors as amae. These results suggest that the Japanese label their dependence on others self-critically as amae.

研究分野：社会科学

キーワード：甘え　援助要請　ソーシャルサポート　文化比較　日本人　アメリカ人　迷惑　規範

１．研究開始当初の背景

土居健郎（1971）の「『甘え』の構造」（The Anatomy of Dependence, 1973）以来、「甘え」は、日本人の精神構造を理解するための鍵概念として扱われてきた。そこでの議論は、英語に訳すことのできない「甘え」という概念は、相互協調的な人間関係を重視する日本人に典型的なものである、というものが主だった（e.g.,土居,1971; Kitayama, Markus, & Kurosawa, 2000）。つまり、「自律を良しとする欧米人は甘えないが、相互依存的な日本人は、甘えの欲求、感情を感じやすく、甘えによる依存関係を肯定的に捉える」という説明である。

しかし、この説明とは整合的に理解できない知見が存在した。１つは、アメリカ人でも甘えに相当する行為を受けた場合に肯定的な感情を持つという知見（Niiya, Ellsworth, & Yamaguchi, 2006）、もう１つは、アメリカ人はアジア人よりも身近な他者にストレス時のサポートを求めるという知見である（e,g., Kim, Sherman, Taylor,2008）。

これらの知見から、アメリカ人は行動レベルで捉えれば、かえって日本人よりも自分のために好意を働くよう他者に頼む甘え行動をとっているのだが、それは当然の権利であり、甘えとは考えていないだけかもしれない、と考えた。反対に、日本人が甘えについて意識するのは、実際に甘え行動を多くとっているからではなく、人に迷惑をかけてはいけないという規範が存在するため、相手への依頼を当然のものと考えることができず、自己批判的に「甘え」と定義するためではないか、と着想した。

２．研究の目的

そこで本研究では、
(1)アメリカ人に比べて、日本人の方が他者に対する甘え行動をとらないこと（ここで、甘え行動とは、「一般的には不適切な行動や依頼を、特定の相手に頼むこと」と定義する。）
(2)一方で、日本人の方が他者への依存を「相手に迷惑がかかるもの」として批判的に評価すること
(3)その批判的評価ゆえに、他者への依存や援助要請を「甘え」と見なすこと
の３点を示すことを目的とした。

ただし、本研究課題開始後、(1)（2)に関しては、援助要請の文脈から類似の研究が公刊され始めたことから（e.g., Ito, Masuda, Komiya, & Hioki, 2015; Morling, Uchida, & Frentrup, 2015)、(3)の目的を主な研究目的とすることとした。

３．研究の方法

以下に、実施した主な５つの研究のそれぞれについて方法をまとめる。

(1)援助要請自粛規範についてのシナリオ実験

日本人大学生 81 名を対象に、「助けが必要な時はすぐに助けを求めるタイプの人」、「助けが必要な時でも他者への迷惑を考えて自粛するタイプの人」の記述を提示し、①自分はどちらのタイプに近いか、②理想の自分はどちらに近いか、③世間の人にはどちらのタイプの人が多いと思うかを尋ねた。もし、日本には「迷惑をかけるべきでない」という規範が存在し、人々がそれに合わせて援助要請を自粛しているのだとすれば、理想の自分は助けを求めるタイプだという人が多いが（②)、世間の人は助けを求めないという知覚された合意が見られ（③)、自分も実際には助けを求めない（①)、というパターンが見られると予測した。

(2)アニメの登場人物に対する印象評定

イギリスで作られた子供向けアニメ（友人からの援助要請を断れなかった登場人物が大変な状況に陥り、頼まれても「No」と言うべきとの教訓で終わるストーリー）を日本人大学生 67 名とアメリカ人大学生 72 名に提示し、その反応を測定した。日本人の方が、援助要請に対して批判的であるならば、援助要請をして相手を困らせた登場人物に対しては日本人の方が否定的に評価し、援助要請を断れずに大変なことになった登場人物に対してはアメリカ人の方が否定的に評価すると予測した。

(3) 援助要請に対する文化的自己観の影響についてのオンライン調査

特に文化的自己観の個人差から見たときに、どのような人が友人間での援助要請を気軽に行うのかについて検討するため、オンライン調査を行った。(株)ボーダーズが運営する「アンとケイト」の 18 歳～59 歳の登録モニター1071 名にアンケートを配信し、675 名から回答を得た（男性 339 名、女性 336 名)。様々な友人に対する援助要請を「1.自粛することが多い」～「4.気軽にすることが多い」の４件法で回答してもらうと共に、文化的自己観（相互独立的自己観・相互協調的自己観)、外向性、対人依存欲求、「迷惑をかけてはいけない」という規範支持について回答してもらった。

(4)友人間、母子間のダイアド調査

ダイアドデータを用い、実際の2者関係（友人関係、母子関係）において、「お互いにもっと甘えられてもよいと思っているのに、必要以上に甘えを遠慮してしまっている」というズレがあるのかどうかを検討した。友人同士の日本人女子大学生100ペア計200名に調査に参加してもらい、お互いの関係と、母親との関係について回答してもらった。母親には質問紙を郵送し、返送してもらった。それぞれの回答者には甘える側として、①相手に自分はどの程度甘えているか、②相手は自分の甘えに対して負担を感じていると思うか、③相手は甘えられてうれしいと思っていると思うかを尋ね、甘えられる側として、④相手は自分にどの程度甘えているか、⑤相手の甘えに対して負担を感じているか、⑥相手に甘えられてうれしいかを尋ねた。

(5)オンラインシナリオ実験

上記の調査では、どのような甘え行動を思い浮かべるかは、ダイアド間で異なっている。そのため、回答者が思い浮かべる「甘え」の内容を統一するため、典型的な甘え行動を提示するシナリオ実験を行った。

それに先立ち、典型的な甘え行動を抽出するために、日米大学生を対象に、「家族や友人などに頼み事をした出来事」、「頼んだわけではないけれども、家族や友人などから助けてもらった出来事」について、具体的経験を列挙してもらう自由回答質問紙調査を実施した。その回答を研究協力者と共にコーディングした結果、日米間では、若干の差異はあるものの、概ね共通の要因が見られた。そこで、その自由回答を基に、日米共通で見られる行動で、かつ家族、親友の両方に対して行う行動、という基準で、「締め切りのある仕事を手伝ってもらう」「夜遅くに個人的な悩みごとの相談にのってもらう」という2つのシナリオを用いることとした。

上記2種類のお願いを、「家族」または「親友」に対してする場面を想像してもらい（2×2の参加者間要因）、自分だったら頼むと思うか、それを「甘え」と思うかなどを尋ねた。

４．研究成果

以下に、上記で述べた主な5つの研究の成果をまとめる。

(1)援助要請自粛規範についてのシナリオ実験

予測に反し、世間の人に「気軽に助けを求めるタイプ」と「自粛するタイプ」のどちらが多いかについては合意が見られなかったが、理想の自分に比べて、実際の自分は「自粛するタイプ」に近いという結果が見られ、実際にはもっと気軽に助けを求めたいのだが、それを遠慮しているということが示唆された。

(2)アニメの登場人物に対する印象評定

無遠慮に援助要請をした登場人物に対しては、予測通り、アメリカ人よりも日本人の方が否定的な評価を示し、その人が責められることのないストーリーに違和感を示した。

しかし、断れずに援助提供した登場人物に対する印象は、予測とは反対にアメリカ人の方が肯定的であった。このことは、援助提供者の行動を、日本人は「断れなかった」と状況要因に帰属したのに対し、アメリカ人は「いい人」という優しい性格に帰属した結果と解釈できる。

(3)援助要請に対する文化的自己観の影響についてのオンライン調査

東洋人に優勢とされる相互協調的自己観の強い人は、迷惑をかけてはいけないという考えから援助要請を行わないというプロセスと、相互協調的自己観が強い人ほど、対人依存欲求が強く援助要請を行うという背反するプロセスが存在し、全体としては援助要請を行いやすいこと、一方、欧米人に優勢とされる相互独立的自己観が強い人は、迷惑をかけてはいけないという考えから援助要請を自粛する傾向もあるが、それとは独立に援助要請を行いやすい傾向が強いことが分かった。

ここから、本研究では、日本人に特徴的な他者に迷惑をかけてはいけないという配慮によって、甘え行動が抑制される側面のみに注目していたが、同時に、相互依存欲求によって甘え行動が促進される側面も検討すべきだということが分かった。

(4)友人間、母子間のダイアド調査

ダイアド間の回答を比較した結果、予測通り、相手が思っている以上に、自分は相手に甘えていると回答し（①と④のズレ）、相手が思っている以上に、相手は自分の甘えを負担と感じていると予測し（②と⑤のズレ）、相手が思っているほどには、相手が自分の甘えをうれしいと感じていると予測しない（③と⑥のズレ）ということが分かった。

また、客観的甘え量を統制したとき、相手が感じる負担を重く見積もる人ほど、自分が相手によく甘えていると主観的に評価していることも分かった。

(5)オンラインシナリオ実験

相手（家族または親友）との関係を、切ることができない安定的な関係だと思う人ほ

ど、シナリオで提示されたようなお願いごとを実際に頼むだろうと回答し、相手は受け入れてくれると予測していた。しかし、そのような人ほど、それを「甘え」と思うわけではなかった。

一方、相手に頼むことが不適切で相手に迷惑だと思う人ほど、そのようなお願いごとを「甘え」と思うということが分かった。

(6)まとめ

以上の結果から、「日本人は人に迷惑をかけてはいけない、という規範ゆえに、他者への依存を自己批判的に『甘え』と定義する」という本研究課題の主な仮説に沿った結果と、「日本人は相互依存的であるため、甘えの欲求、感情を感じやすい」という従来の説に沿った結果の両者が見えた。

従来の説に沿った結果としては、より日本文化に典型的と考えられる相互協調的自己観の強い人ほど、依存欲求ゆえに援助要請をするという側面があること、相手（家族または親友）との関係を切ることができない安定的な関係だと思う人ほど、シナリオで提示されたようなお願いごとを実際に頼むだろうと回答し、相手は受け入れてくれると予測していたこと、などが挙げられる。相互協調的自己観や、そこで重視される他者との親密な関係は、援助要請を促進する側面もあることは確かと考えられる。しかし、人々が、そのような援助要請を「甘え」と見なしているかどうか、という話になると、そのような結果は見られず、逆に本研究課題の仮説を支持する結果が得られた。

具体的には、日本人は、アメリカ人よりも他者への迷惑を考えずに援助要請をする人を否定的に評価すること、もっと気軽に助けを求めたいと思いつつ、それを自粛していること、より日本文化に典型的と考えられる相互協調的自己観の強い人ほど、相手に迷惑をかけてはいけないという規範支持により、援助要請を遠慮する側面があること、親しい 2 者間においても、相手が実際に思っている以上に、相手の負担を大きく見積もり、その負担の見積もりの大きい人ほど、自分がよく甘えていると評価していること、シナリオに提示されたお願いごとを不適切で相手に迷惑だと思う人ほど、そのような行動を「甘え」と呼ぶことなどが分かった。

これらのことから、少なくとも自分の行動について述べるとき、「甘え」という言葉は、自己批判的なラベルとして用いられることが明らかになったと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計　６件）

①<u>針原素子</u>、他者依存の自己批判的ラベルとしての「甘え」：ダイアドデータを用いての検討、東京大学社会心理学コロキウム、2016 年 11 月 25 日、東京大学（東京都・文京区）

②<u>Harihara Motoko</u>, *Amae as a self-critical view of dependence among the Japanese*. The 23rd Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, 2016, August 2nd, ウィンクあいち（愛知県・名古屋市）

③<u>Harihara Motoko</u>, Senzaki, Sawa, & Niiya, Yu, *Who is to be blamed, the inconsiderate help seeker, or the too considerate help giver? Comparison between the U.S. and Japan*. The 16th annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology, 2015, February 27th, Long Beach(USA)

④<u>針原素子</u>、友人間の援助要請行動に及ぼす文化的自己観の効果：対人依存欲求と「迷惑をかけてはいけない」規範に注目して、日本心理学会第 78 回大会、2014 年 9 月 12 日、同志社大学（京都府・京都市）

⑤ <u>Harihara Motoko</u>, *Examination of negative attitude toward help-seeking behavior among Japanese*. The 10th SPSP Cultural Psychology Preconference, 2014, February 13th, Austin(USA)

⑥ <u>Harihara Motoko</u>, *Examination of cultural norms for help-seeking and help-offering behavior among Japanese*. The 10th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology, 2013, August 23rd, Yogyakarta(Indonesia)

６．研究組織

(1)研究代表者

針原　素子（HARIHARA, Motoko）
東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教
研究者番号：８０６１５６６７

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

先崎沙和（SENZAKI, Sawa）
University of Wisconsin-Green Bay, Department of Human Development and Psychology, Assistant Professor